

Documents authentiques を使った学習活動

中 村 公 子

0. はじめに

最近、「アクティブ・ラーニング」という言葉をよく目にする。テレビや新聞などでも紹介される機会が増えている。アクティブ・ラーニングとは「教師による何らかの情報を学習者に与えるだけの一方通行の授業ではなく、学習者が自ら問題を発見し、その問題に対して学習者同士で考え話し合いながら、協力して問題解決を目指し、コミュニケーションを取りながら実際に体験することを通して学習していく教授法」だと言えるだろう。日本語で「能動的学修」と呼ばれることもある。

本稿では、このアクティブ・ラーニングそのものについての言及はしないが、授業において、学習者がグループで助け合い話し合いながら、発見や協力、体験することを通して学習を進めていく過程を示したいと思う。その一例として、学習者が主体的に学習を進めるためのモチベーションをあげる効果が期待できる documents authentiques を用いた授業の組み立て方を取り上げる。

まず、documents authentiques とは何なのか、それはいつ頃、どのような形でフランス語教育の中に取り入れられるようになったのか、documents authentiques の特徴や問題点などをまとめる。その後、ある documents authentiques を用いた授業の組み立て方を activités の一例として示す。

1. Documents authentiques

ここでは、documents authentiques について、これまでになされてきたいくつかの定義からあらためて定義し、そして、フランス語教育に documents authentiques が取り入れられた背景をまとめる。

1.1. Documents authentiques とは何か

まず、いくつかの documents authentiques についての定義を見るが、その前に、参考までに日本語教育の分野では 1990 年代初頭に「生のもの」として次のように説明されている¹⁾。

学習者向けに特に作成された教材ではなく、ネイティブ・スピーカーの間の会話やネイティブ・スピーカー向けに作られた素材を指す。新聞、雑誌から採った記事やラジオ、テレビ番組から録音したものは生のものといえる。

次に、『フランス語をどのように教えるか』²⁾を見ると次のような記述がある。

広告、説明書、手紙、シャンソン、フィルム、ラジオ、テレビ放送などといった、現実の生活の中で使用されているさまざまな資料を、「教材」として変更を加えるのではなく、「生のまま」使用 (...)

この二つの記述では「生」という語が共通して使われている。「生」とは「教材用に作成されたものではない」ということを意味している。

次に、*Dictionnaire de didactique du français* から、もう少し詳しく documents authentiques についての記述をみる。

*La caractérisation d'« authentique », en didactique des langues, est généralement associée à « document » et s'applique à tout message élaboré par des francophones pour des francophones à des fins de communication réelle: elle désigne donc tout ce qui n'est pas conçu à l'origine pour la classe. (Cuq, J.-P., 2003)*³⁾

ここでは、教材用ではないということの他に、「フランス語話者のために実際のコミュニケーションを目的として作られたもの」であることが記されている。さらに、その種類については以下のように続けられている。

Le document authentique renvoie à un foisonnement de genres bien typés et à un ensemble très divers de situations de communication et de messages écrits, oraux, iconiques et audiovisuels, qui couvrent toute la panoplie des

productions de la vie quotidienne, administrative, médiatique, culturelle, professionnelle, etc. (ibid.)

Documents authentiques には多種多様なタイプがあり、様々なコミュニケーションの状況を反映している。日常生活や事務手続き上のもの、またメディアを利用したものや文化的、職業的なものなど、あらゆるタイプのものが含まれている、とある。

これらの定義から document authentique の定義を次のように提案したい。

「Document authentique とは教材用に作成されたものではなく、フランス語話者のために実際のコミュニケーションを目的とした、日常生活の中で学習とは関係なく見聞きしているものすべてを対象としている。それらの中からフランス語の学習のために教材として取り入れた素材を document authentique と呼ぶ。」

1.2. 歴史的背景と méthodes の中の documents authentiques

Documents authentiques がフランスの méthodes（総合型テキスト）に取り入れられたのはいつ頃なのだろうか。Dictionnaire de didactique du français によると、1970 年代、ちょうど SGAV の終わり頃に « documents bruts ou sociaux » として取り入れられたようである⁴⁾。1970 年代と言えば、SGAV の最終段階の méthodes が出版された頃である。出版年は 1980 年代に入ってからになるが、SGAV の最終段階の méthodes の中で、documents authentiques を大きく取り入れたのは *C'est le printemps* である。テキストの前半部分は dialogues に基づいたカラーのイラスト集であるが、後半はすべて documents になっている。様々な統計のデータや地図、デモなどフランス社会の現実を垣間見せてくれる写真（それ以前は観光名所などの写真が多かった）、星占い、BD や雑誌の抜粋などが掲載されている。実際の資料に混じって documents authentiques 風に作られたと思われる資料も含まれているので、すべてが documents authentiques とは言えないかもしれないが、それでもテキストの後半がすべて documents になっている méthodes は後にも先にも *C'est le printemps* だけである。

現在では、各課のテーマや dialogues の内容などに関連した documents authentiques が随所に見られる méthodes がほとんどである。例えば、時刻表や TGV の切符、広告、映画や演劇などのプログラム、レストランのメニュー

などの documents がある．もちろん、これらの documents がすべて documents authentiques とは限らないが、仮にその documents が semi-documents authentiques であったとしても、日常生活の中で目にするものを教材に取り入れようとしている意図にかわりはない．

では、なぜ、*C'est le printemps* 以降、現在にいたるまで documents (authentiques) を méthodes に取り入れるのだろうか．次の章では documents authentiques の特徴について検討する．

2. Documents authentiques の特徴

2.1. documents authentiques を méthodes や授業に取り入れる理由

E. BÉRARD は documents authentiques を用いる理由として三つ挙げている⁵⁾．以下にその三点について簡単にまとめる．

1) 学習への動機付けの観点から

初学者であれば、現実のやりとりを理解できることが良い動機づけになる．この動機付けについては *approche communicative* において学習上、重要な役割を担っていると考えられている．

2) 学習者の自律を促す

Documents authentiques を使って教室でやりとりなどができるのであれば、教室外での現実の場でも同じことができるという考えに基づいている．documents の内容と同じくらい « *apprendre à apprendre* » の重要性を説いており、例えば、学習者はフランス語話者の中で生活する時、人々とのやりとりだけではなく、新聞やラジオ、映画などのメディアからも情報を得ることになる．

3) 学習する言語について

実際に、コミュニケーションの場でのやりとりで使われる言葉は、言語そのものについてだけではなく、その言葉が発せられた場所や時間などとも関わっている．つまり言語学的な観点からだけではなく、言語の実用的な側面、あるいは社会言語学的な観点についても学習することになる．

この三点から documents authentiques がフランス語学習の中に取り入れられる理由を考えると、documents authentiques は学習者の（学習への）動機付けに役立ち、また実際のものを通して教室外でのコミュニケーションで

も通用する運用力養成の可能性を持っている。そして、発話を言語的な側面からとらえるだけではなく、その言葉が発せられた背景（TPO）とも関連させて実用面での言語使用について学習できること、と考えられる。

このように学習上の効果が期待できる documents authentiques だが、日本のフランス語教育においては長い間 documents authentiques はテキストや授業では取り入れられずにいた。それはなぜなのか、次にその理由について考察する。

2.2. documents authentiques の長所と短所

A. Disson によると、日本で documents authentiques があまり使用されないのは、その内容の豊富さ故⁶⁾としている。たとえば、documents authentiques を使用するにしても、音声であれば簡単にしたり授業に合うように録音し直したりされ、紙媒体の documents であれば、学生には面白みに欠けるような真面目過ぎるテーマを扱った新聞や雑誌の記事などに限られていた、とある⁷⁾。そんな中で、映像についてはより頻繁に使われていたという指摘もあったが、それは上級者レベル向けに補助教材のような扱い方であったようだ。長い間、日本では documents authentiques は初学者向けに使用するのとは不可能、もしくは非常に難しいと言われてきた理由がここにある⁸⁾。しかし、これは先ほど述べた E. BERARD の documents authentiques を使用する三つの理由と矛盾しないだろうか。学習者のモチベーションをあげ、実際のコミュニケーションの場で役立つ学習効果が期待できる documents authentiques であるならば、まさに初学者にこそ使用すべきなのではないか、という疑問が起こる。そこで、次の章では、documents authentiques をフランス語の初学者向けに使用するために、activités の一例を段階を追って提案してみたい。

3. 授業での Documents authentiques を用いた activités の組み立て方

この章ではある document authentique を用いた場合の授業について考えてみよう。何らかの document authentique を用いる授業では、従来の文法訳読法を取り入れた授業ではなく、様々な activités を実際に学習者に実践させながら進めることになる。それは、そのまま使用できる従来のテキストとは異なり、document を使用する場合には学習者自身が段階ごとに作業をすることによって、学習項目を多角的にアプローチすることになるからである。何度も同

じ内容に触れながら実際に使用することになり、学習項目の定着率がよくなるのである。D. BEAU⁹⁾によると、我々が何かを記憶する時、どのようなことをして覚えたかによって、記憶の度合いが異なると言っている。

(...) *nous mémorisons:*

- 0% *de ce que nous lisons;*
- 20% *de ce que nous entendons;*
- 30% *de ce que nous voyons;*
- 50% *de ce que nous entendons et voyons;*
- 80% *de ce que nous disons;*
- 90% *de ce que nous disons en faisant.*

これを見ると、「読む」だけではほとんど記憶に残らず、「聞く」だけでも20%、「見聞き」してやっと50%記憶できることになる。ところが、実際に何かの作業を「しながら口に出して言う」と記憶の度合いは90%と示されている。ここに示されている割合の根拠については言及しないが、それでも学習者が何らかの実践を通して学習内容の定着がよくなることを、教師であれば誰でも経験的に知っているのではないだろうか。

そこで、documents authentiquesを用いた débutants 向け学習活動の一例を、学習者自身が何かしらの作業をしながら学習を進めていくことを前提に、いくつかの段階ごとに示すことにする。

3.1. Documents authentiques の使用

まず、どのような documents authentiques を選ぶのかという問題がある。

A. DISSON は次のように言っている。

*Il suffit au niveau débutant de limiter son emploi à un objectif simple: utilisé même de façon parcellaire, le document devient accessible tout en gardant son aura et sa « couleur » françaises.*¹⁰⁾

初学者に対しては学習目標に合わせて documents の使用ができれば、何らかの制限の中であっても documents が持つフランスの雰囲気や「色」は損なわれることはない。確かに、テキスト用ではなく「本物」が題材であると学習者のモチベーションは上がる。それはテキストの中のフランス語ではなく、現

実社会と結びついた「生のフランス語」であり、フランス語話者が日々の生活の中で目にしているもの、あるいは耳にしているものだからであろう。

また E.BERARD は「documents の選定は学習の状況や学習者のニーズに応じて¹¹⁾」なされるものであるとしている。教師は自分自身の興味や関心から documents を選ぶのではなく、まず学習目標を立て、その上で活用できそうな documents を探すことになる。

例えば、仮に「買い物をする」という acte de parole を学習目標に設定し、「買い物に必要な単語や表現を学習する」という学習内容があるとする。この学習目標に合う documents として「スーパーの広告」を利用することにし、その利用法を次に考えてみる。

3.2. 利用法と組み立て方

一例として、スーパーの広告を取り上げるが、フランスのスーパーの広告は薄い冊子になっていることが多い。初学者に対して、あまりに情報量の多すぎる documents は好ましくないで、その広告からある一部分を選んで使用することになる。例えば、果物や野菜の写真が値段と共に掲載されているページを選ぶとする。大きな写真で果物や野菜が2つ3つ、1キロあたりの値段や1個あたりの値段と共に提示されている。写真という視覚的な助けもあり、学習者は見慣れたものであればすぐにその document が何を意味するものであるのかを理解するだろう。しかし、「買い物をする」という学習目標をたてたのなら2つ3つの単語では間に合わない。そこで、単語を足すことになる。初学者の場合、合計10個くらいまでが提示する語数としてはちょうど良いように思われるが、学習者によっては5,6個から様子をみて少しずつ増やしていくこともできる。新出単語を10個加えるのは、10個くらいであれば多すぎることもなく、また買い物できる品物を選択することもできるからである。

次に、写真やイラストなどを見ながら提示した10個の単語の発音練習をする。そして、それらの単語を記憶してもらう。この時、10個の単語が書かれたイラスト付きカードを学習者自身に作成してもらうと記憶しやすくなる。これは個人でもかまわないが、個人の作業よりも数名のグループで作成した時のほうが記憶につながるような印象がある。これはおそらくグループでカード作成をしている間に様々なことを話し何度もその単語を発音しながら作業をするからだと思われる。作成したカードは豊富な activités に利用できる。以下にいくつか例を挙げる。

(カードはフランス語が書かれている面と日本語が書かれている面があり、フランス語ほうにはイラストがついたものを作成した場合.)

1. フランス語を発音してフランス語のカードをとる
2. フランス語を発音して日本語のカードをとる
3. 日本語で言ってフランス語のカードをとる
4. 一人目の人がある語をフランス語で言い (une pêche), 二人目の人が一人目の言った単語に続けてもう一つ自分で選んだ単語を言う (une pêche, une poire), これを数名のグループで 10 個の単語を言い終わるまで続ける. 10 個目の単語を言う人は 10 個すべての単語を言うことになる.
5. 数名のグループで、一人が出題者になり、例えば 10 個の単語の中で「p で始まるもの」と問題を出す. 他の人は pêche や poire を答える.

使用する単語の学習を終えると、「買い物をする」という学習目標のメイン内容である「買い物をする時の表現をモデル会話から学ぶ」段階に入る. この時、状況設定が不可欠であるが、「お店の人」と「買い物客」の会話なので、買い物をする場所はスーパーではなく「八百屋さん」や「果物屋さん」ということになる. 選んだ document authentique はスーパーの広告であったが、スーパーでの買い物であればお店の人とやりとりをするまでもないので、状況設定は学習者にしっかり伝える必要がある.

モデル会話は初学者向けであれば、ごく簡単なやりとりのシンプルなモデル会話を準備しておけばよいだろう. このモデル会話は、身近なテキストなどを参考にすればすぐに組み立てられる.

学習者が「買い物をする」表現や単語を理解し一通りの説明や学習を終えたら、実際に学習者同士でやりとりを実践することになる. この時、必要であれば、モデル会話にない表現を 2 つ 3 つ加えることもできる. まずはグループ内で、そのグループで作成した品物カードを使って何度もやりとり練習をする. すべてのグループで同時に行われているこれらのやりとりをすべて教師は把握することはできないが、数回、やり取り練習ができた頃、いくつかのグループに「買い物をする」やりとりをクラスで発表してもらい、その中で間違いそうな箇所や勘違いしている箇所などをクラスで指摘すればよい.

最後に、クラスでグループごとに作成したカードを使って、例えば 6 グループあるとすれば 6 つのお店があるように見立て、各グループから 1 名が「お店の人」として売り子さん役をする. 売り子さんの 6 名以外の学習者は全員お客

さん役になり、実際のお店のようになり、自分のいたグループ以外のお店で買い物
のやりとりをすることができれば仕上げ段階に入る。クラス全体で、カード作
成した単語の見直しや買い物の表現を見直して、質問などがあれば回答して終
わる。

ある document authentique を用いた時の activités の大きな流れを紹介した
が、これはほんの一例に過ぎない。

3.3. 注意点

3.2. で挙げた例を見てもわかるように、documents authentiques は特に初
学者向けに使用する場合、テーマを提供し、学習内容の道筋をつける役割が大
きい。Documents そのものを扱うというものではないことも多いが、これま
でに学習者から寄せられた感想として、documents authentiques を使用する
と「モチベーションが上がる」、「印象に残りやすい」、「惹き付けられる」、「夢
中になれる」など好意的なものが多かった。興味を引き、学習のモチベーショ
ンアップにつながり、さらに定着率をよくする可能性が documents
authentiques にはあるということになる。

しかし、良いことばかりに見える documents authentiques にも問題点はある。
E.BERARD は documents authentiques について「documents 選択とそ
の使用、学習計画の中での documents の位置づけ」を大きな問題点として挙
げている。また「documents が必ずしも authentiques である必要はない」と
も言っている¹²⁾。なぜなら、以下のような問題点が別にあるからだ¹³⁾。

1. (フランス語圏以外の) 外国でフランス語の授業のために自由に使える
documents がそれほど身近にはない
2. メディアからとれるものは入手しやすいかもしれないが、タイプによっ
ては録音することが難しいものもある(商取引や脈絡のない会話など)
3. 場合によっては、教師一人では手に負えないこともある。documents
を選んだり、その documents から activités や授業を組み立てたりしな
ければならないので、負担がおもすぎる

現在では、インターネットやその他技術的な進歩のおかげで、フランスや世
界中のフランス語圏から地理的に遠い所にある日本でも、かなりの docu
ments authentiques を手に入れることはできる。しかし、今度は豊富にあり
すぎる documents からどのようなものを選択すればよいのか、情報と一緒に

あふれた状態の documents を前に途方にくれることにもなりかねない状況なのである。

また、*Dictionnaire de didactique du français*¹⁴⁾でも指摘されているように、documents authentiques を授業に用いた時点で authenticité が失われるという説もある。なぜなら、授業に取り入れられた時点でその documents は本来の意図とは異なった解釈がなされ、教育的配慮のもとに扱われるからである。しかし、重要なことは、document authentique から伝わるコミュニケーションの状況を尊重して活用し、信憑性を復元すること¹⁵⁾であるとするならば、それが言語教育の場で活用されようとも「本物」としての価値にかわりはないはずである。

Documents authentiques を授業で使用する時には、可能な限り、その documents の本来の目的を考慮しながら、また現実社会の中での実際のコミュニケーションにおける役割に則して使用することが必要なであろう。

4. おわりに

ここまでみてきたように、documents authentiques の授業内での使用については様々な困難や問題も含まれてはいるが、従来のテキストにはない効果も期待できる。授業準備や授業運営については考慮すべきことに注意しながら工夫する必要はあるが、実際の activités につなげることで documents 本来の意図を損なうことなく使用することも可能ではないかと思う。そして、その本来の意図からフランスの文化的側面や社会的側面に話題を広げていける可能性もあるのだということを忘れてはいけない。

もし、学習者が学習言語を使用するコミュニケーション場面に応じて、それぞれの場面で使える documents authentiques がリストとしてまとめることができるならば、documents 探しの一助となるに違いないだろう。今後、授業を通してこの取り組みをさらにすすめていきたいと思う。

参考文献

- BÉRARD, E. (1991): *L'approche communicative*, CLE International.
 CUQ, J.-P. (2003): *Dictionnaire de didactique du français*, CLE International.
 DISSON, A. (1996): Pour une approche communicative dans l'enseignement du français au Japon — Bilan et propositions —, Presses Universitaires d'Osaka.

MONTREDON, J., CALBRIS, G., CESCO, C., DRAGOJE, D., GSCHWIND-HOLTZER, G., LAVENNE, C. (1981): *C'est le printemps*, CLE International.

岡崎敏雄, 岡崎眸 (1990): 『日本語教育におけるコミュニケーション・アプローチ』, 凡人社.

中村啓佑, 長谷川富子 (1995): 『フランス語をどのように教えるか』, 駿河台出版社.

注

- 1) 岡崎敏雄, 岡崎眸 (1990): 『日本語教育におけるコミュニケーション・アプローチ』, 凡人社. p.288
- 2) 中村啓佑, 長谷川富子 (1995): 『フランス語をどのように教えるか』, 駿河台出版社. P.175
- 3) CUQ, J.-P. (2003): *Dictionnaire de didactique du français*, CLE International. p.29
- 4) *ibid.*
- 5) BÉRARD, E. (1991): *L'approche communicative*, CLE International. pp.50-51
- 6) DISSON, A. (1996): *Pour une approche communicative dans l'enseignement du français au Japon — Bilan et propositions —*, Presses Universitaires d'Osaka. p.166
- 7) *ibid.*
- 8) documents authentiques はあまり日本では使用されないものであったが, しかし, 日本でも 1981 年に授業で使用することを目的とした documents authentiques をまとめたテキストが出版されている. TAJIMA, H. et DISSON, A. (1981): *Documents authentiques pour la classe de français (niveau I)*, DAISAN-SHOBO.
- 9) BEAU, Dominique. (2008): *La boîte à outils du formateur*, Eyrolles. p.121.
- 10) DISSON, A. (1996): *Pour une approche communicative dans l'enseignement du français au Japon — Bilan et propositions —*, Presses Universitaires d'Osaka. p.167
- 11) BÉRARD, E. (1991): *L'approche communicative*, CLE International. p.53
- 12) *ibid.* p.52
- 13) *ibid.*
- 14) CUQ, J.-P. (2003): *Dictionnaire de didactique du français*, CLE International. p.29
- 15) *ibid.*